

陽一さんとの出会いと学科創設のころ

佐 藤 進（東京都立大学名誉教授）

私是一九六八年に東京都立大学人文学部に入学し、翌一九六九年に中国語中国文学専攻（中文専攻）に所属した。もともと大学全体が少人数教育を売り物にしており、人文学部は特に少人数で、とりわけ中文専攻は一学年多くても四名程度であった。私の学年は比較的多くて六名だったが、私以外はすべて女子学生で、私は黒一点であったのである。

一学年下の専攻生はたった一人で、しかも女子学生。とはいっても、一九六九年という年は、いわゆる学園闘争のピークで、二年目のほとんどは学園封鎖で休講続き、年度末になってようやく授業が再開された。

中文専攻の授業は学年別に実施されるのではなく、学年縦断、ものによっては大学院学部共通という時間割が少なくなく、専門科目はほとんど先輩男子学生といっしょのことが多かった。したがって、黒一点という環境はそれほど気にはならなかった。それでも二年下、一九七〇年度入学の学年では男子がいるという情報には心が躍った。

学園闘争中に辞職した教員が何人かおられて、一九七一年度の授業は変則的な感じで、中国語文法の科目を、本来は会話作文が担当であるところの外国人講師・楊名時先生が担当した（先生は著名な太極拳の指導者でもあった）。教科書は中国で発行された『漢語語法』という学校教科書を日本で複製したもの。その授業を古い校舎の陽の当たらない北側一階の教室、廊下よりも一〇センチほど低い床の寒々とした教室で受けた。

その授業にやや遅れて出席してきたのが鈴木陽一さんだった。一年間の教養課程中国語の履修経験で受講するには敷居が高かったようで、授業の終わりに「ちょっと難しいので遠慮します」と言いつつ教室を出てゆく後姿が、私の網膜に残る陽一さんの第一印象である。

しかし、コンパや合宿では俄然陽一さんが精彩を放っていた。落語は得意だし、談論風発、合宿にはギターを担いできて、常に座の中心にいた。授業では、分野違いなので同席することは少なかったが、学生のたまり場（正式には演習室）ではほぼ毎日のように顔を合わせた。気晴らしに校庭に出て、むきになってバドミントンのシャトルを打ち合って汗にまみれた。むろん、遊んでいるだけではなく、私が後輩たちとやっていた『文選李注義疏』の読書会に陽一さんも出席したし、逆に、陽一さんが主宰する『西遊記』の読書会に私も加えてもらった。この読書会経験は、後に教壇に立つてからのバックボーンになってくれたのである。

その後、陽一さんが大学院博士課程に進んだ年に、私は富山大学に就職したが、付き合いはけっこう濃厚に続いていた。一九八六年春に、私は国際交流基金の派遣で北京にいたが、その間に今の奥さんと結婚することになり、式典を盛り上げましょうという相談になって、北京から国際電報で祝電を送った。その新婚旅行先が中国で、お見えになったご夫妻と一緒に、北京の宮廷料理「倣膳」で卓を囲み、伝説の料理をごちそうになった。

その年の夏時分だったと思うが、神奈川大学外国語学部に一九八九年から中国語学科を設立するための準備中と聞き、それは大仕事だなと案じていると、豈はからんや、主任教授となる予定の東文研所長だった尾上兼英先生が、佐藤を呼ぼうと主張なさった。それで八六年の秋に陽一さんと尾上先生が富山までわざわざ日帰りでお出で下さったのである。

尾上先生が駕を曲げて来られて、お断りできるほど私は大物ではない。しかも、同じころに、母校都立大学の恩師慶谷壽信先生から、近々空席が

出るから、都立大に赴任する準備をしておかれない旨の便りが来ていた。迷いに迷った私が、陽一さんと共通の先輩、関西大学の日下恒夫先生に相談の電話を入れると「手伝ったれや」との一言。それが決め手になって、悪くすると学科完成年度の一九九三年度を待たずに転出する可能性を認めていただきつつ、神奈川大学中国語学科の設立メンバーに加わることとなった。

ところが、一九八九年の着任直前に都立大学の人事が現実的になった。学科発足前の三月のある日、慶谷先生が尾上先生に面会し、喫茶店のテーブルをはさんで「佐藤君をいただきます」と発言したのみで、沈黙の時間が延々と続いたという。沈黙に弱り果てた尾上先生が最後に「致し方ありません」と承知せざるを得なかったと伺った。

そういう次第で、一年という限定期間ながら、学科の立ち上げに力を合わせる事となった。集まった一期生は特に印象深いものだが、中国学科一期生たちは、いずれも明るく人懐こい若者だった。私の前任校富山大学では、学生主体のガリ版不定期雑誌『中文春秋』というものを発行していた。神奈川大学でも学生諸君と相談して、『起飛』（離陸の意）というタイトルで出すアドバイスをしたもの懐かしい。ゼミ生を数人引き受けて、卒業論文までこぎつけた時には、これで新学科は軌道に乗れるかなと一安心したものである。

私はすぐに転出せざるを得なかったが、バブル経済以後に新設した学科のほとんどが改廃を余儀なくされる状況の中で、こうして存続しえたのは胸を張ってよいことだ。

転出してからも、一九九五年度までは非常勤でお手伝いした。実を言うと、神奈川大学に通う楽しみの一つが、陽一さんたち神大教職員テニスクラブのメンバーとテニスをやることであった。夏休みの河口湖テニス合宿にも二三度は参加した。学生時代の校庭のバドミントンを続けていたよう

な塩梅で、教員になっても学生気分が抜けない我々であった。

しかし、まさに光陰矢の如し。その間に、私の癌と脳卒中、陽一さんの心臓疾患、二人でみごとに三大疾病を経験した。それでも、お互いに大病を乗り越えながら教職を全うして古希を過ぎ、教室を離れることになった。私も二〇二一年春に、四つ目の勤務校、北海道文教大学を退職した。これからはフェイスブックなどを通じて、劣化した日本の政治や社会を罵りつつ、近況を報告しあうことになろう。

願わくは、努力して餐飯を加えよ。